



研究室での研究体験の様子:(写真左)植物採集および標本作成作業の体験(写真右)組織切片作成実験の体験



東京ツアーの様子:小石川植物園にてレクチャーおよび園内見学

4日目の東京大学附属小石川植物園訪問では、特任助教の先生に導かれ、彼らの指導により研究体験しました。

ソウル市立大学から招へい  
生命科学分野の研究技術交流  
2023年11月13日から17日までの5日間、韓国のソウル市立大学の大学院生6名と教員1名を東京都立大学に招へいして、交流プログラムを実施しました。実施にあたり、理学研究科生命科学専攻の大学院生14名(留学生6名を含む)に学生企画委員となってもらい、プログラムの企画を担当してもらいました。ソウル市立大学の学生が来日する前の10月27日にオンラインのプレミーティンクを行い、双方の大学院生の顔合わせとプログラム概要の説明、滞在中に研究を体験してもらう研究



高橋 文  
(東京都立大学  
理学研究科生命科学専攻  
教授)

東京都立大学の活動報告

II 特別連載 II

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第396回

プログラムスケジュール

11月13日	来日、オリエンテーション
11月14日	個別研究室にて研究体験
11月15日	個別研究室にて研究体験
11月16日	東京ツアー、小石川植物園見学
11月17日	TMU-UOSバイオカンファレンス (ジョー教授によるセミナー、学生ポスター発表)
11月18日	帰国

室の紹介、学生間の連絡方法の確認などを行いました。学生企画委員がミーティングで使用するスライドの作成や当日の司会などを全て行い、充実した内容となりました。

11月13日に来日し、オリエンテーションや



バイオカンファレンスの様子:ポスター発表と活発な議論



意見交換会後の集合写真:ソウル市立大学のジョー教授(後列左端)と6名の大学院生(前列)。後列は東京都立大学の学生企画委員

少なく、自分達がアレンジした企画で韓国の学生をホストするという今回の経験は貴重だったと考えています。若くは多感な時期に韓国と日本の学生及び日本に來ている留学生がこのような交流を通して友情を育んだ経験は、これからのグローバルな社会で主体的に活躍していく上で生かされていくと考えます。今後は、このような短期間の交流に加えて、ソウル市立大学の教員との研究上のつながりの強化により、大学院生のより長期間の研究滞在や、オンラインを利用した国際共修など、より恒常的な国際連携へと発展できたらと考えています。

レクチャーと園内の案内をお願いしていたのですが、電車の遅延により到着時間が遅れるというハプニングがありました。そのため、残念ながら時間は限定されてしまったのですが、広い園内を同行した学生企画委員4名とともに見学することができました。

5日目は、本学生命科学科で毎年開催しているバイオカンファレンスにおいて、招へいたソウル市立大学生命科学科のイークフン・ジョー教授による英語セミナーが開催され、多くの大学院生および教員が出席し、活発な議論がなされました。また、ソウル市立大の学生には全員ポスター発表を行ってもらい、本学科との良い研究交流になりました。

大学院生のポスターには「ポスター賞」が設けられていました。ソウル市立大の学生1名と学生企画委員1名が授賞し、良い思い出になったと思います。その後開催された意見交換会では、軽食を囲んで本学科の教員や学生と活発な交流を行うことができました。

全体を通して、本学の学生企画委員の連携はとてよく、リーダーと副リーダーが中心となって担当する事項の役目を分担し、留学生と日本人の学生をバランスよく配置するなど、多様性を考慮しながら企画する力をつけてもらうことができました。企画委員間の連絡はSNSを利用しましたが、コミュニケーションはほとんど英語でした。普段自分の研究室以外との交流が限られていた留学生も、フルに貢献してもらうことができた点は、留学生と日本人学生との自然な交流につながり、

学科内の研究交流の促進にもつながったと考えています。

また、ソウル市立大の学生にとっては、普段体験しないマクロ分野の研究を体験したり、研究内容について意見交換をしたりしたことで生命科学分野に関する視野が広がるきっかけになったと考えています。

本学科とソウル市立大学の生命科学科との交流はすでに10年以上続いています。双方に新しく加わった教員もおり、今後も交流を続けていきたいと考えています。「さくらサイエンスプログラム」の支援によって、今年度も充実した交流プログラムを実施することができましたことを大変感謝しています。

### ■今後の展望

本プログラムを通して、一緒に交流した本学の日本人学生への教育効果は特に大きかったと考えています。大学院生の学生企画委員を募集して、自主的に研究体験などの企画を任せるといったプログラムでしたが、日本人学生だけでなく留学生も多く参加してくれたことで、多様性を活かした企画力の強化につながりました。

本学の生命科学科では、学部での授業を全て英語でとることができ、大学院では留学生も多いことから、日本人の学生も異なる国籍の学生と英語によるコミュニケーションをとることに對する垣根は比較的低いと見られます。しかし留学生と一緒に何かを企画するという機会は